

死に戻りの神子は災禍の王の溺愛を知らない

離原

霄琳を助けた謎の青年。
美しい容姿を持ち、
何かと霄琳を気に掛ける。
霄琳の身の上についても
何か知つている様子だが……



本作の主人公。記憶喪失の中、
自分を助けてくれた
離原と旅をする事になる。
手の甲に不思議な模様がある。

白霄琳

一

落ちた、と思った。それほどの衝撃だった。

けれどすぐに違うとわかったのは、見開いた視界に天井が映つたからだ。屋根がないのか板の隙間からは月明かりが漏れているが、人一人が突き抜けたほどの大穴はなかった。

痛いほどに胸が鼓動している。夢を見ていた気がするが、思い出せない。

(誰かが呼んでた……)

悲痛な声で、誰かに呼ばれていた。それだけは覚えているが、それ以上は頭の中に立ち込める霧がすべてを隠してしまって、名前はおろか、姿さえはつきりとした像を結んでくれなかつた。

額に浮いた冷汗を手の甲で拭いながら、天井の隙間から見える月明かりに目を細める。鼓動につられて荒いままでの息を整えようと深呼吸した時だつた。

ガタガタと戸が引かれるなり、ぬつと人影が入ってきて、月明かりの中に浮かび上がつた。夜闇に溶け込むように全身が黒尽くめのその人物は、目以外を黒い布で覆っている。視線が合うと、びくりと体の動きを止めた。

「——まさか、目が覚めたのか?」

滑りの悪い戸を後ろ手で閉めながら、長身の影が唸るように言う。どうやら成人した男のようだ。男が足を踏み出すと床板が悲鳴のような軋みを上げるものだから、怖ろしさが増す。思わず開いた口が震えた。

「な、なんだよ、あんた誰だつ」

「……」

男が動きを止める。ギシッと音を立てた床は今にも割れそうだ。壁のように立ちはだかる男の口元がまた動いた。

「……お前、名は」

「俺？ ……俺は白霧琳はくきりんだけど……」

するりと名前が口をついて出たとたん、雷が落ちたかと思うほどの音が耳をつんざいた。見れば、ついさっき男が入ってきたばかりの扉が破られ、何者かが押し入ってきたところだつた。

「くそが……つ！」

驚く間もなく黒尽くめの男が霧琳を抱え込むなり、あらうことか体当たりをして小屋の壁を突き破つた。

男は放たれた矢のように駆けていく。誰かと鉢合させをしたらと霧琳はひやひやしたが、酒楼の灯りも見当たらないような小さな集落の路地はひつそりと静まり返り、誰かが出てくる様子もない。それだけが幸いだつた。

がくがくと揺さぶられる霧琳は必死でしがみつきながら、男の肩越しに背後を見た。

追手は離れることなく霧琳と黒尽くめの男を追いかけてきていた。こちらもどんでもない速さで走つており、その距離は次第に縮まつているように思えた。

「待て！」

追手の叫び声と同時に、霧琳は目を見開いた。走つているだけでも落ちそうで怖かつたのに、霧琳を抱えた男が腰に帯びていた剣を放るなり、それに足をかけて飛び乗つたからだ。

急速に地面が遠ざかり、追つてきた男の姿も小さくなる。跳躍したのではなく、空を飛んでいる。霧琳は一瞬で自分の血の気が引いたのを感じた。

「た——助けて！」

自分を抱えた男の思惑も、追手の狙いも霧琳にはわからない。ただただ剣という細い足場に立つた男に抱えられて飛ぶのが怖い。無我夢中でとつさに手を伸ばすと、地面から同じように剣に乗つて飛び上がつた追手の手が唐突に迫つた。

「うあっ」

伸ばした手を大きな手のひらが掴みかけたが、あわてたように黒尽くめの男が軌道を変えて更に上昇する。指先が一瞬触れ合つただけで、追手と霧琳の距離は開いた。

このままではどこかへ連れて行かれる。離れてしまふ。

（いやだ！）

ざつと体中が総毛立つた瞬間、霧琳はじたばたともがいた。黒尽くめの男は舌打ちをして騒ぐなと怒鳴つてきだが、それよりも追手の男と距離が開くのが怖くてたまらない。

「うう……っ！」

暗闇の向こうに手を伸ばす。すると一瞬、霄琳たちと同じように空を飛んで追いかけてくる男の手元が光つた。あつと思った時には、闇を裂くように銀色の刃がまっすぐに飛んできて、霄琳を抱えた男の脛のあたりをザッとえぐつた。

「ぐあつ」

とたんに肩に抱ぎ上げられている霄琳ごと、黒尽くめの男が大きく揺らぐ。どうにか持ち直そうとしたようだつたが、もう遅かつた。

勢いもそのままに、霄琳は夜の空に投げ出された。

落ちていく。今度こそ落ちていく。

ふわりと浮いた霄琳の手の甲に、淡い光が見える。それが何かわからないまま、霄琳は風を切る音を響かせながら猛然と飛んできた追手を見上げた。

(あ、傷……)

追手が頭からかぶつていた布が、激しい風に浮かれて後ろに流れている。そこから現れた、横に大きな傷跡の残る顔。怖ろしさは感じず、なぜだかほつとした。

しかしその安堵もつかの間だつた。腕を掴んで引き寄せられたあと、ぐつと抱きしめられた霄琳の意識は、息つく間もなく夜よりも深い闇に覆い尽くされた。

その閉ざされた白い瞼を、風を切つて進む男がどこか痛みをこらえるような顔をして見つめたことなど知らないまま。



どうぞ、と差し出された花は何輪目だつただろう。

わずかに揺れる輿の中から外を覗いていた霄琳は、笑顔で小さな手から花を受け取つた。

「ありがとう」

お礼を言うと、花をくれた子ははにかんで駆けていく。近くで待つていたらしい母親と一緒に手を振つてくるから、思わずこちらも微笑んで手を振つた。

「腰は痛まないか」

声をかけられたが、霄琳はそちらに向かないまま、うんと頷いた。初めて訪れた大都市の風景に夢中だつた。

街中が活気に溢れている。人々の声は高く空に響き、ひしめく店はどこも盛況だ。

窓から見える景色はもちろん、もらつた花々の芳香が心を浮き立たせる。匂いをかいだとたん、ふわりと吹き上がつた風に煽られた。目を開くと、気付けば花園の中にいた。手入れされた花たちの中に立ち尽くす霄琳は、顔をあげた。

花園の向こう、まるで鏡のように晴天を映す水面の真ん中に、小さな四阿あずまやがある。その中に立つ

人影に呼ばれたのだ。

一
霄
琳

彼が呼んでいる。行かなければ。

嬉しくなつて駆け出そうとしたとたん、足元が抜けた。

とつさに伸ばした手が空をかく。今にも大粒の雨を降らせそうな曇天を見上げながら、霧琳は落ちた。

背中を突き上げるような衝撃があつて、雷琳は真っ暗な中に転がつた。すると、ぱたぱたと頬に

(雨……違う。これは……涙)

詎かか霄琳を呼んでいる 悲しみと苦痛
こたえなけれど、霄琳は口を開いた。
深い絶望をはじめさせた衝突か霄琳を呼んでいる

〔一〕

でも、呼びたい名前がある。それは――――――

「りげん」

ふつと目を覚ました霧琳は、伸びた手の先に梁の渡された天井を見た。

天井の茶色い木目から浮き上がるような白い右手。ほつそりとした白枝のようなそれは己のものとは思えないが、腕は確かに自分の肩からまっすぐに伸びている。

しかし、やはり見覚えのないものもある。手の甲では、橢円の先端が尖った、いわゆる紡錘形の銀色の紋様が光を放っていた。それはまるで植物の種子のように見えた。

擦つてみても消えない。むしろ、見えていなかつた左手にも同じものがあることに気が付いて、霄琳の頭には疑問が増えてしまつた。

(これなに? それに、これ……俺の手じゃない)

霽琳の手は年中鍬を振るい、籠を編み、弓を引くために傷つき続けた平民の手のはずだ。まるで貴族のように白いこの手は、どう見ても自分のものではない。

いた。

どういうことだと混乱している中、肩を滑つてさらりと落ちた髪に雷琳はさらにぎょっとした。黒く染め抜いた絹糸のような細くつややかな髪。肩から前に落ちたそれを軽く引いてみた雷琳は、

備考

だ。けれど、やはりそれが自分ものだとは信じられなかつた。

混乱に首をひねつてゐると、不意に足音がした。顔をあげた霄琳は、そこで初めて、やけに整然とした一室にいることに気付いた。

生活感は薄く、広くはない部屋の中には霄琳が体を起こしている寝台と同じものがもう一台と、その足元の方に小さな卓子、それから二脚の椅子がある。民家というよりは宿屋だ。そして卓子のすぐ向こうに扉があつて、足音はその前で止まつた。

とたんに霄琳の脳裏に蘇つたのは、昨夜の出来事だ。廃屋で出会つた黒尽くめの男に抱えられて空に舞い上がり、追つてきた男に助けを求めた。あのあと自分は落下して――

「あつ……」

ざつと鳥肌が立つて、視界の焦点が歪む。

――扉の向こうから現れるのが、あの男だつたら。
緊張に息をひそめた霄琳だつたが、開かれた扉の向こうを見るなり、強張つた肩から力が抜けたのを感じた。開いた扉から姿を現したのは、最初に霄琳をさらつた方の黒尽くめの男ではなかつた。（そうだ、追つてきた人が俺を受け止めてくれたんだつた……）

風をも裂くような速度で飛んできて、落下する体を受け止めてくれた男。あまりの勢いに彼の顔を隠していた覆いが取れ、その下から現れた大きな傷を霄琳は覚えていた。
そして今、目の前で盆を持つてゐる男の顔も傷も同じものだつた。

「……目が覚めたか」

呆然とする霄琳の前を横切つた男は持つてゐた盆を卓子に置き、卓子ごと霄琳の近くに引き寄せた。

「起きたならちよどいい。腹が減つてるだろう。いくつか買つてきた」

盆には布がかぶさつていたが、それが取り払われると饅頭が三つと野菜の浮いた汁物が現れた。
「まずは食べててくれ。それから聞きたいことがある」

霄琳も男に聞きたいことがあるが、混乱していく疑問さえまとまらない。そもそも男の素性はおろか、名前も知らない。

そんな相手から差し出されたものをやすやすと口にしていいとも思えなかつたが、蒸したての饅頭とやわらかな風味の汁物はいかにも美味しそうだし、腹も空いていた。
(命を狙つてるなら、俺が寝てる間に殺すこともできたはずだよね……)

氣を失つたのは夜だつたが、今は窓から陽光が差し込んでいる。一晩あれば、霄琳を手にかける機会などいくらでもあつたはずだ。

きっと大丈夫だと自分に言い聞かせて、男が饅頭を一つ手に取つたのを皮切りに、霄琳も同じものを口にする。互いに無言のまま食事は進み、やがて差し出された水を受け取つた霄琳は、結局何も話さないまま食事に没頭してしまつたことに気付いた。

「あの、ごちそうさまでした。お代は……」

「金はいい。それより、聞きたいことがある。話をしてもいいか?」

「うん」

霄琳が頷くと、男は卓子を押しやつて自分の椅子を寝台に寄せた。

距離が詰められたことで男の顔を改めて見た霄琳は、整っていると素直に思った。

筆でまつすぐに線を引いたような黒々とした眉の下には鋭い光を宿す双眸があり、鼻筋も通っている。ただ、右目の下から左に伸びた一条の傷跡が鼻梁を横断していて、その線は左の頬の高い位置まで続いていた。そのうえ口が真一文字に引き結ばれているせいもあって気難しそうにも粗暴そうにも見えたが、仕草や声に荒々しさはなく、むしろどこか老成したような落ち着きがあった。

「まず、名前を教えてくれないか」

「霄琳。白霄琳だよ」

名前は白霄琳だ。考るまでもない。しかしその質問に、霄琳の口は答えを失った。

「……わかった。ならば、白霄琳。出身はどこだ？」

「出身は……あれ、出身……？」

開いた窓からさつと風が吹く。冷たい風ではないのに背中がぞくつとして、霄琳は思わず両手を握り締めた。

自分の名前は白霄琳だ。出身は、家族は、生まれた日は……

「……」

頭の中に靄があるというよりは、まるきりすべてが抜け落ちていいかのようだ。

名前だけがはつきりとしているが、それ以外がわからない。そうなると唯一言える名前すら自分のもののか怪しくなって、霄琳は一気に心もとなくなつた。

思い返せば、あのあばら屋で目覚めるより以前の記憶がない。唯一覚えているのは、夢で誰かに呼ばれていたこと。声は霄琳を呼んでいて、それは自分のことだと思ったのだ。

「俺は、白霄琳……」

なんとか声を絞り出す。それ以上何も言えなかつた。
嘆息すると、わかつたと頷いた。

男は呆然と呟いた霄琳をじっと見下ろしていたが、思い出せと詰め寄つたりはしなかつた。一つ
「無理に思い出さなくていい。他に具合の悪いところはないか？」

「ない……でも、なんか変なんだ。俺、こんな手じやなかつたし、髪もこんな風じやなかつた。そ

れに、これ……」

違和感の最たるものは、握り締めた手の甲に輝く銀の模様だ。いつたいなんなかと指先で少し
強めに触れても消えることも崩れることもなく、当たり前のように肌と一緒に引き攣れた。

「これなに？ 呪い？」

一見して美しいものだが、得体が知れないものは恐ろしい。何かしらの悪いものではと不安に眉
をひそめた霄琳に、男は首を振つた。

「それは花錆かでんだ」

「花錆？」

言われて、霄琳はまじまじと自分の手の甲を眺めた。それならば霄琳も知っている。いわゆる貴人と呼ばれるような人々が額や眉間に花や紋章を描く装飾だ。しかし花錆は消えるもので、霄琳の

手の甲にあるものは擦っても消えない。

違うのではと思ったものの、男の話は続いた。

「俺もあの男……黒衣も、花鉢を宿す者を探していた」

「黒衣？」

「本名じゃない。俺がそう呼んでいるだけだ。ただ、お前が白霧琳であり、花鉢を持つ以上、あいつの狙いは一つ——お前の命だ」

「……」

告げられた言葉の鋭さに、霧琳は息を飲んだ。

さっき水をもらつたばかりなのに、口も喉もからからに渴いていた。

ただ、どうしても聞かなければならないことがある。震えそうになる唇をゆっくりと開いた。

「じゃあ……お兄さんも、俺の命を狙つてる？」

この男のことを、霧琳は何も知らない。まだ、名前すらわからない。

けれど、双眸はそらされることなくまつすぐ霧琳を見つめていた。

「俺は離原。お前を生かすため、ここにいる」

二

離原と名乗った男に、霧琳は驚いた。夢で呼んだ名前と一緒にだった。

(もしかして俺が覚えていないだけ?)

もしそうなら知り合いだとつてきそうなものだが、その素振りはない。同じ名前なだけで違うのか、それとも何か理由があつて霧琳にそれを告げずにいるのか。考えてもわからない。

結局霧琳は名前のこととは一旦置いて、少なくとも彼が霧琳の命を狙つているわけではないということだけを受け止めた。

「それは……俺を守ってくれるつてこと?」

生かすというならそういうことだろうと解放した霧琳に、離原は頷いて見せた。

「そうだ。だから、これから周苑しょうえんに向かおうと思つていてる。周苑はわかるか?」

「わからない……」

おそらく地名なのだろうが、まったく覚えがない。それどころか、ここがどこかもわかつていない。

霧琳が首を振ると、離原は懐から地図を取り出して広げた。とんと指さされたのは、山間の町だった。

「まず、ここが半胡。今いる町だ。お前が目覚めた村から、二百里ほど離れている」

「一百里!?」

すつとんきような声が出た。二百里など、徒歩であれば三日か四日はかかる距離だ。そんなに遠くまで来たのかと驚く霄琳に、離原はこともなげに顎を引いた。

「そして、ここが周苑。この永玉国の国都だ。ここにお前を連れて行きたい」

半胡から長い指がすっと移動した先に、周苑はあった。目測でも、半胡からはそれこそ二三百里どころか千里でも足りないほどの遠地だ。

「こんなに遠く……なんで周苑に行くの？」

思わず呟くと、離原はすまないと言つた。

「黒衣から守るには一番適した場所なんだ。お前を匿える場所もある。協力者もいる。だから、周苑へ連れて行かせてほしい」

名前しか自分のことを知らない霄琳だ。記憶がないものだから頼れる相手もない。

今の霄琳が知っている他人は離原と黒衣だけで、離原は霄琳を生かすためにいると言つてくれた。それが本当かを確認するすべはないが、単衣に裸足で銭貨すら持っていない霄琳にできることとは、ただ彼を信じることだけだ。

一緒に来てくれるかと聞く離原に頷くと、彼はほつとしたように目元を少しやわらげた。

「道中、できる限り不便がないようにする。なんでも言つてくれ」

そう言つた離原は翌日、霄琳に靴を買つてくれた。

「り、離原さん。俺、あんまり高いのは買えない……」

今は手持ちがないが、あとで返すつもりだ。だからあまり高いものは困るのに、離原は宿を出ですぐのところにあつた靴屋の主人を捕まえると、あれやこれやと見るからに高価そうな靴を持ってこさせた。

霄琳としては履いて歩ければそれでいいのに、離原は霄琳が二度見したほどの金を払つて、ふくらはぎの中ほどまで隠す長靴と、足の甲が見えるような浅い布靴、それから靴下を三足買つた。「離原でいい。金も返す必要はない。周苑まで連れて行くのは俺の都合で、お前はそれに付き合つてくれるにすぎない。だから費用は俺が持つて当然だ」

そうは言つても宿代だって食事代だって、すべて離原が支払つた。せめて感謝の言葉をと思い、ありがとうと言うと、男は目を細めて少し笑つた。

ようやく靴を得た霄琳を連れてさらに離原は町中を歩き回ると、霄琳の服を数着揃え、保存のきく餅もいくつか買つた。

「他に必要なものはあるか?」

半胡を出る際、そう聞かれた霄琳は少し迷つて武器屋に寄つてもらつた。

「剣がほしいんだけど、俺でも使えそうなのつてあるかな」

これから向かう周苑は、千里以上も離れた先にある。その道程で何があるかわからないし、せめて自分の身を自分で守るすべを得たい。そう思つて店中を見て回つた霄琳が手にしたのは、小回りの利く小剣だつた。

武器というよりは生活をするうえで使いやすい小刀に近いものだが、試しにと持たされた長剣や槍に比べればはるかに扱いやすく、手になじんだ。

「それでいいのか」

「うん。いざという時に使えなかつたら意味ないし」

そんな時は来てほしくはないが、何もないよりはましだ。

そうして買ってもらつた小剣を腰帯に差せば、もう旅支度は終わりだ。

ならば旅を急ごうとさつそく町を出た一人だつたが、問題は即座に起きた。

霄琳が、剣に乗れなかつたのだ。

平行に浮いた剣の上に立つた離原に手を取られ、霄琳も一応は刃の上に足を乗せた。しかしそこまでだつた。

「ふ、ごつ……ごめん、だめ、こわ、怖い……」

三尺ほど浮き上がつたところで、霄琳は耐え切れずに悲鳴じみた声をあげた。両手で離原に抱きつき、恐怖から逃げるよう胸に顔をうずめる。膝も震えて、立つているのがやつとだつた。

夢で感じた落下の恐怖が、脳裏どころか体の芯にまで焼き付いているかのようだつた。

怖がる霄琳を支えたまま剣を降下させた離原は、すぐに剣を鞘に戻した。

離原は何も言わなかつたが、剣で飛ぶことができればよかつたのは明白だ。目指す周苑は、徒步で行くには遠すぎる。

呆然と考えこんでいた霄琳は、やがて一つの考えに至つた。

「……ごめん、離原。こんなことを言うのは悪いんだけど……夜に飛刃で移動するはどうかな。俺すごく熟睡する方だし、その間に飛んでもらつて、昼間は宿とかで離原が寝て休む。そしたらもつと早く着くと思う」

霄琳が落ち着くまで待つてくれていたらしい男は、提案を聞いてはくれたが、すぐに首を振つた。

「いや、荷馬車を買おう」

名案だと思った霄琳の考えは、一瞬で却下された。

「一時的に飛刃を使うことはあるだろうが、それ以外は馬でいい」

そう言つて店に向けて踵を返そつとするものだから、霄琳はあわてて離原の服の裾を掴んだ。

「馬なんて買わなくていいよ。大丈夫、寝てる時なら移動されても気付かない。なんなら眠り薬も飲む」

これが名案のはずだと信じる霄琳は言いつのつたが、離原は決して頷いてくれなかつた。

「確かに飛刃での移動は早いが、利点は速度だけだ。お前の苦痛より優先すべきことではない」「苦痛つてほどじや……」

「ない、とは言えなかつた。」

怖さはある。ぐんとすべてを引き上げられるような浮遊感、そして落下の恐怖。考えるだけで血の気が引き、胸が早鐘を打ち始める。離原の裾を掴んだままの手も震え出した。

（なんで？ 夢なのに）

怖さはある。ぐんとすべてを引き上げられるような浮遊感、そして落下の恐怖。考えるだけで血の気が引き、胸が早鐘を打ち始める。離原の裾を掴んだままの手も震え出した。

あれは眠りの中で見た幻のはずだ。それなのに、思い出すだけで冷ややかな恐怖が這い上がつてくる。

落ちるのは怖い。死の先には何もない。

(――怖い)

「霄琳」

泥濘の中を沈んでいくような意識を現実に引き上げたのは、離原の声だった。

はつとして瞬きをすると、頬から伝い落ちた涙がぱたぱたと膝に落ちたところだつた。

「あ、……あれ……？」

なぜ泣いているのかという疑問と、不意に増した恐怖が意識をかき乱す。けれどその中に飲み込まれる前に、伸びてきた腕が霄琳を抱き寄せた。

「霄琳。……俺がわかるか？」

大きな手のひらが震える背中を撫でてくれる。そうすると、強張った体から余計な力が抜けていくような気がした。

「わか……わか、る。離原……」

呼吸が苦しい。鼓動が早すぎてくらくらする。助けを求めるようにしがみつくと、離原はなんの躊躇いもなく霄琳を抱きしめた。

本来の鼓動の速さを思い出させるように、どんどんと手のひらが背中を叩く。静かな声に、霄琳と呼ばれた。

「この旅を案じてくれるのは嬉しい。だが、お前の苦痛を蔑ろにはしたくない。これは俺の願いだ。何ひとつお前のせいではない」

静かな低い声が、耳に滔々と響く。それだけで霄琳の中で荒れ狂っていた恐慌が治まっていく。ぐずつと鼻をすすつた。はあと吐いた息は熱かつたが、吸い込んだ空気が火照った胸を冷やしてくれる。瞑つた目の縁からはまた涙が零れて頬を伝つたが、霄琳の胸の中は安堵に満ちていた。

「大丈夫だ、霄琳。俺がお前を守る。――そのために出会えたんだ」

飛刃で移動することを諦め、離原と霄琳は新たに買った荷馬車で出立した。

荷馬車の旅はのんびりしたものだったが、快適だった。

落下の心配や恐怖がないだけではない。すべてにおいて、離原が甲斐甲斐しく世話をしてくれるからだ。

半胡を出て三日、今日も野宿になつたが、荷馬車の中には道中の村で買つた布団があるし、食べ物や飲み物だつて積まれている。ここにしようと離原が馬車を停めたのが深い山中でも、霄琳に異存はなかつた。

離原は馬から降りると、符を手にして周囲を飛び回り始める。荷車に乗つたまま、霄琳はその光景に目を凝らした。

初めて野宿をした日に教えてもらつたそれは、侵入者を察知するための禁衛条(きんえいじょう)という術の符だと聞いていた。

「侵入者を察知するための術だ。符と符の間を何かが通ればわかるようになつていて。山中は獣や妖魔が出やすいからな」

その時は離原の言葉にあわてて周囲を見渡した霄琳だつたが、幸いにも今日まで熊や妖魔の類に

は出くわしていなかつた。

ひとしきり飛び回つた離原が飛刃から降りたのを確認して、霄琳は荷車から顔を出した。

「出てもいい？」

「ああ」

のそのそと出てきた霄琳は、空を見上げた。

空中からの襲撃にも備えた形で符は配置されているらしいが、その包囲網は霄琳からは見えない。侵入者がかかつたら蜘蛛の巣みたいに絡みついたりするのかなどと考えていると、視界の端に枯れ木を抱えた離原が映つた。

「禁衛条(きんえいじょう)が気になるか？」

「うん、すごいなつて。こういうのって、どうすればできるようになる？」

「修行だな。まずは大体は門派に入り、研仙になる。研仙は修行中の身だ。日々の鍛錬や修練を経て、様々の術を使うことができるようになる。それが長じれば、仙師になる」

「じゃあ、離原も修行した？」

「ああ。門派に属したことはないが、師事したことはある。あとは独学でやつてきた」

「飛刃も？」

「飛刃は基礎だけ習つた。あとはひたすら書物を漁つて実践を繰り返しているうちにできるようになつた。時間だけはあるからな」

「じゃあ他にも何かできる？」

霄琳の頭の中の仙師はあやふやな像だ。空を飛び、仙術を操つて驚くようなことをする。それくらいしか想像することができない。離原は鼻を横断する傷を歪ませながら苦笑した。

「俺ができるのは飛刃を操つて空を飛ぶことと、簡単な符を使うこと、衝撃波で攻撃をすることくらいだ。あとは剣術か」

そう言うと離原は腰を上げた。

「そろそろ夕餉の準備をしよう。日が暮ってきた」

「ほんとだ……もう暗くなつてきたね」

離原の言葉に、霄琳も動き出す。二人で手分けして食事の準備を終える頃には、すっかり日は落ち、森は夜陰に沈んだ。

そこかしこに人の気配や灯りがある人里と違つて、山の夜は静かで深い。木々の間を移動する鳥の羽ばたきや、虫の鳴き声、かさここと動き回る小動物の足音、時折吹き抜ける風に葉が擦れる音だけがあり、空を見上げれば美しい星が見えた。

簡単な食事を終えてぼんやりと空を見上げていると、離原がごそごそと荷車をあさり、小さな墨壺と筆を出してきた。そして前にも見せてくれた地図を懐から取り出して地面に広げると、筆で印をつけ始めた。

少しの間それを見ていた霄琳は、樹に預けていた背を起こした。

「離原」

「うん？」

「教えたくなかったら言わなくていいんだけど……何か探してる？」

地面に広げられた地図には、墨で名前を消された村や町がいくつもある。ちょうど今筆で消されたのは、今日通つてきた町の名前だ。ここ数日、人里があればそこに寄り、買い物をしながら何かを聞いて回つている離原を見ていた霄琳は、ずっと機会をうかがつっていた。

（俺にも手伝えるかな）

馬車を操るだけでなく、旅全般において離原の世話になりっぱなしの霄琳だ。少しでも何か役に立てないかと思つていたのだ。

少しの緊張と高揚、それからわずかな不安で霄琳の声は上ずつたが、離原は特に拒む様子もなく顔をあげた。

「植物を探している。絶滅しているとは思うが、種子や花が残つてしたり、記述のある文献がないかと思つて、聞いて回つている」

意外な返答に、霄琳はへえ、と声を漏らした。

「なんて植物？」

「俺たちはカケイシ……霄琳？」

「かけいし……」

繰り返したとたん、頭の中でパチンと水泡が弾けたような感覚があった。

「ああ、カケイシ……霄琳？」

すぐ隣にいるはずなのに、離原の声はどこか遠くに聞こえる。地図を見ているはずなのに、霄琳

の視界に広がるのは違う光景だ。

(なんだっけ、かけいし……花？ 花園があつて……書庫の卓子の……)

今まで頭の中になかったはずの映像がどつと押し寄せる。

美しい花園、書庫に置かれた卓子の瀟洒な飾り彫り、山査子飴さんざいを差し出す手、誰かが呼ぶ声——

「霄琳！」

「——あ、つ……」

大きな声に、体が震える。一瞬どこにいるかわからなくなり、両肩がやけに痛んだ。はつと目を見開くと、険しい顔の離原が霄琳の両肩を握りつぶさんばかりに掴んでいた。

「いつ……いた、痛い、なにつ？」

思わず悲鳴をあげると、離原ははつとしたように手を緩めたが、その表情はいまだ焦りを含んでいた。

「あ、ああ——すまない、大丈夫か？ 僕が誰かわかるか？」

「誰つて」

離原だと言おうとした瞬間だつた。

バリンと薄く硬いものが碎け散る音がして、体が大きく揺さぶられた。気付けば霄琳は地面に転がり、その上に離原が覆いかぶさっていた。

「——なつ」

悲鳴をあげるより先に跳ね起きた離原が素早く剣を抜いた。転がつたままの霄琳の頭上で、金属

が激しくぶつかる音が響く。

あわてて起き上がった霄琳は、月明かりを背負つて離原と鍔迫つている男を見上げた。黒尽くめの隙間から覗く目に、背中がざつと総毛立つ。

「黒衣……！」

喉がひゅつと嫌な音を立てた。黒衣の目は立ち上がった霄琳を射貫くように見つめていて、その間に離原がいることなど忘れてはいるようではある。だが、それも長くは続かなかつた。

離原が一步踏み出し、同時に剣を振り上げる。刃同士がせめぎ合う鋭い音は耳が痛くなるほどで、霄琳は気圧されてじりじりと後ずさつた。

「白霄琳！ 花鉗が見えたぞ、やはり鈴祇れいしか！」

怒号を聞いたとたん、体の震えが止まらなくなつた。

あの声はだめだ。怖い。

ふらふらと揺らいだ脚は、耐え切れずに踵を返して駆け出した。

「待て、白霄琳！ 今度こそお前を……!!」

「行かせるか！」

刃が打ち合う音が静かな夜の森に響き渡る。

声に追われるよう走り続け、ようやく霄琳が止まつたのは蹴つまずいて転んだからだつた。
「はつ、はあつ、はあ……つ」

胸が焼けるように熱いのに、ぜいぜいと荒い呼吸を繰り返す喉に滑り込んでくる夜の空気は冷た

い。あつという間に渴いた喉で必死になつて唾を飲みこみながら立ち上がった霄琳は、ゆっくりと背後を振り返つた。

剣戟は聞こえない。その静けさがなおさら不気味だったが、霄琳の頭の中を占めていたのは、投げつけられた聞きなれない言葉だつた。

(鎧祇？俺のことを言ってた？)

知らない言葉だ。それなのに胸がざわつく。

「どこか……」

不安に駆られ、霄琳は周囲を見渡した。洞窟か、せめて樹のウロにでも隠れたい。転んだ時にひねつたらしい右脚を引きずりながら歩いていると、不意にがさりと音がした。

風に吹かれた葉が立てる音ではない。草を分けて、誰かが歩き回つている音だ。

黒衣か、離原か。まばらな月明かりだけが頼りの樹々の奥を見つめながら身構えていると、影がゆらりと夜闇の中から現れた。

(……獣じやない。でも、離原なら俺を呼ぶはず……)

近づいてくる影は、声もあげなければ刃を振りかざして襲つてくる様子もない。とっさに霄琳は腰帯に手をやつた。指先に触れるのは、半胡で離原に買つてもらつた小剣だ。引き抜く時が来てしまつたと思いながら目を凝らそうとしたとたん、霄琳はびくりと肩を揺らした。

ゆらゆらと心もどなかつた影の動きが唐突に早く、明確に霄琳を目指し始めた。

「――ひつ」

たまらず霄琳は駆け出した。大きく体を揺らしながら近づく影の背後から、同じような影がいくつも続いてくるのが見えたからだ。

(なにあれ、なにあれ!?)

駆け出す寸前、霄琳は闇の向こうから近づく者の輪郭をはつきりと捉えた。あれは離原でも黒衣でもない。人でもなかつた。

逃げる霄琳の背後を、音は決して離れずに追いかけてくる。時折フオーウとくぐもつた鳥の鳴き声のような声がいくつもこだまして、それが氣味の悪さを引き立てた。

「う、ぐつ……」

右脚は限界だつた。熱を持つてじんじんと痛み、足先を地面につけるだけで響く。樹々を伝うようにながらも逃げていた霄琳だが、とうとう動けなくなつてしまつた。

鳴き声がどんどん近くなる。やがて距離が詰められ、まばらな月明かりの中に浮かび上がつた姿に、霄琳は絶句した。

猪の頭を細く伸ばしたような顔に人の体。口からは赤黒い長い舌をぶら下げている。その先端から粘度の高い糞をだらりと落としながら、異形は嗤うようにまた鳴いた。

「ひつ……うわつ、わつ」

思わず悲鳴をあげて退こうとした霄琳だったが、その瞬間、限界を訴える右脚の激痛にもんどうつて転がつた。あわてて体を起こした時には、目の前に三体の異形がいた。

異形たちの口からはガチガチと音がする。腐つた血肉のような臭いが鼻先をかすめて、えづきそ

うになりながらも霄琳は腰の小剣を引き抜いた。

武術の心得などないが、これで怯んでくれたらしい。しかしそんな願いもむなしく、鞭のようにしなった異形の腕が剣を弾き飛ばし、つられて霄琳も地面に転がった。

「うつ……」

抵抗はあつけなく終わり、もう武器さえない。くじいた足の痛みも強く、立ち上がることさえできまい。それでも草の合間に転がった剣を取ろうと這いつくばつたまま手を伸ばした霄琳は、異変に気付いて目を丸くした。

「成長してる……？」

霄琳の手の甲には、今も消えずに花鉗がある。それが明らかに成長していた。植物の種のような模様だけだつたはずが、それを起点に伸びた蔓が手首に巻き付くような絵柄になつていてる。

白い手の甲できらきらと輝く花鉗を見つめて一瞬だけ惚けた霄琳は、恐怖も忘れて綺麗だと思った。

しかしそんな感想を抱いたのもつかの間、異形たちが草を踏んだ音で我に返つた霄琳がぐつと伸び上がりつて剣を掴んだとたん、しなる異形の腕が再び繰り出された。

剣を握り締め、とつさに目をつぶる。しかし異形の指が届くより先に、霄琳の喉は引き攣つた悲鳴をあげた。

「うああっ！ 痛い、痛い痛いいああああ……！」

花鉗の浮き上がる両腕に、突如耐えがたいほどの激痛が走つた。視界が揺れるほど痛みはひど

く、吐き気さえこみ上げてくる。そんな中、生理的に溢れた涙で揺らぐ視界は、突然現れて縦横無尽にのたうつ銀の蔓でいっぱいになつていて。

うねうねと動き回る蔓は夜闇にも輝くまばゆいもので、それらは霄琳と異形の間に壁を作つていく。まるで籠を編むように交差していく隙間を伸びた舌が挿い潜ろうとしたが、察知したように一瞬で編み目が密集し、その空隙は塞がれた。

「フオオアアア!!」

蔓の壁の向こうで、異形たちは怒りの声をあげている。だが、それに構う余裕もなく痛みに震える霄琳は、ぼろぼろと零れる涙の向こうに信じられないものを見て呆然とした。

霄琳を取り巻き、球状になるこうとしている銀の蔓の源流は、霄琳の手の甲にある花鉗だつた。

（なに？ なんで？）

混乱と痛みに泣き呻く間にも、銀の蔓はするすると動き回る。やがてそれは球体を成し、霄琳はその中に閉じ込められた。

外ではまだ異形が騒いでいる。銀の蔓で作られた球体を攻撃しているのか、ガリガリと引っ搔く音や何かを叩きつける音もする。

「うつ、ああっ……、ぐ……つ」

両腕が痛くてたまらない。それでもこの蔓の壁が破られてしまえば、あの異形の餌食になる。それだけは嫌だと、取り落とした小剣をふたたび握り締めた霄琳の耳に、激しい音が響いた。

ザツと風を切るような音がしたかと思うと、異形たちの悲鳴があがつた。固いものを切るような

音も聞こえる。

蔓の壁を隔てた向こうで何が起きているのかわからず、霄琳は小剣を握ったまま胸を喘がせた。ここで気を抜いてはだめだと壁の向こうを睨みつけた霄琳だったが、その向こうから響いた声に、詰めていた息を吐いた。

「霄琳、この中にあるのか？ 無事か？」

荒い呼吸の合間に霄琳を呼ぶのは、離原の声だ。気が抜けて思わずぼうっとしてしまった霄琳だが、壁を外から軽く叩かれて、はっと我に返った。

「い、いる、中にいるよ！ 怪我はないけど、足を捻ったみたいで……」

とつさに声を張り上げると、壁の向こうの離原がほつと息をつくのが聞こえた。

「出てこれるか？ 俺の剣でもこれは切れない」

「待って、中から……」

切ってみるはどうか、と小剣を振りかざした霄琳は、ふと気付いて腕を下ろした。

花鋏はまだ手の甲にあり、模様も手首まで伸びたままだ。しかし蔓はなくなり、いつの間にかあれほどひどかつた痛みも消えている。

どうしてと思った矢先、不意に頭上から降り注いだ輝きに上を向いた。

見ると、球体を形作る銀の蔓がまるで霧雨のようになつて崩れていく。さらさらとした銀色の輝きは夜闇に溶け消え、やがて座り込んだ霄琳だけが残された。

「霄琳……今消えたものは……」

静まり返つた中に、離原の呟きが落ちる。その手にはどす黒い何かを拭つた跡のある剣が握られていた。

「わ……わかんない。でもこれ、俺の手から……この花鋏から出て……」

信じてはもらえないだろうと焦つて霄琳は言つたが、離原は否定も疑いもしなかつた。ただどこか苦しげに眉を寄せ、歯を食いしばつているようだつた。

座り込んだままの霄琳に歩み寄つた離原は傅くように膝をつき、霄琳を抱きしめた。

「……やはり、お前は鈴祇なんだな……」

（また、鈴祇……）

何もかもがわからない。手の甲にある花鋏の正体も、銀の蔓が出たきつかけも、ひどい痛みも、鈴祇と呼ばれることも。ただただ謎が増え、自分がわからなくなつていく。

霄琳の肩口に、離原の顔が埋まる。その体温はなぜか懐かしく思えるものなのに、不安でたまらなかつた。

自分で足をかけて乗るのではなく、抱き上げられての移動なら耐えられるかもしれないと思つた

霄琳だが、やはり飛刃での移動に耐えることはできなかつた。

恐怖はもちろんあつたし、浮き上がつたとわかつた時は悲鳴も出た。けれど背中に回された腕は霄琳がしがみつくより強く抱きしめてくれていた。だから大丈夫だと思つたが、恐怖のせいなのか、

それとも自分で立てないほど疲弊していたせいか、気付けば街中に降り立っていた。

「ごめん、俺また……」

「氣にするな。それに、それほど飛んでいない」

「ここは？」

「定英という街だ。ここが一番近かつた」

すっかり夜も更けているため、小さな街には至る所に提灯の灯りがともつていて。離原はすぐ近くにあつた宿の門をくぐつた。

「一人だが、部屋は空いてるか。怪我人がいるんだ、休ませたい」

酒場が併設されているその宿は、もう遅い時間ながらそこそこ賑わっている。喧騒の中を縫つて出てきた番頭に声をかけると、帳簿をめくつた男はううん、と唸つた。

「一人用の部屋しか空いてねえな。そこでも良いってんなら、上掛けくらいはもう一枚出すよ」

「そこでいい。それから、包帯と打ち身か捻挫に効く軟膏がほしい」

「包帯と軟膏？ 揃えることはできるが、もう夜だ。明日届けるつてのは……」

「今ほしい」

宿費も含めてこれで、と離原は銭貨を置いた。馬も荷も森に残してしまつたが、金だけは持つてきていたらしい。台にコトント置かれた金色の輝きには番頭だけでなく雷琳まで目を見開いた。

「いつ、急いで揃えさせていただきます。他に何かご入用のものは？ お部屋も他を移動させれば

どうにか……」

「部屋はそのままでいい。急いでくれ」

かしこまりましたと声を張り上げた番頭は呼び寄せた店員に離原たちの案内を頼み、あわただしく店を出て行つた。

店員の先導で部屋へ向かつた離原は、通された一室の寝台に雷琳を下ろすと戸口で立つたままの店員を振り返つた。

「足を洗いたい。水と手拭いをもらえるか」

「はい、ただいま」

腰に剣を佩いたまま店員に言付ける離原は、店員が去るとすぐに雷琳の前に膝をついた。

「足を診よう。まだ痛むか？」

「少し」

熱を持つてじんじんと疼くが、挫いた時ほどひどい痛みではない。だが離原は慎重に長靴から雷琳の足を抜くと、靴下も取り去つた。

「……腫れてるな。骨は折れていないうだ」

離原は雷琳の裸足を丁寧に観察する。なんだか恥ずかしくて、雷琳は診られていない方の脚を軽くぶらつかせた。

「さつきよりは、だいぶ良くなつてるよ」

痛みが強かつたのは、挫いた直後に走つたりしたせいだろう。思ったよりひどい怪我ではなかつ

たようだと霄琳は楽観的だが、離原は神妙な面持ちで赤らんだ足首を見つめていた。

「……他に、怪我は」

「手のひらをちょっと擦つたくらいかな。すぐ治ると思う」

ほらと開いて見せた両手のひらには擦り傷があるが、うつすらと血がにじむ程度で、大したものではない。大丈夫だと安心してもらえるかと思つたのに、離原の顔はさらに険しくなり、眉間にうつすらと皺まで寄つた。

「お客様、御用命のものをお持ちしました」

なんでそんな顔を、と思った霄琳が手を引っ込めかけた時だつた。扉の向こうから声があがり、離原が応じると、さつき店を飛び出していつた番頭が顔を出した。手に持つた盆には包帯が二巻と薬包がいくつか載つており、後ろには水桶と手拭い、それから薄い上掛けを携えた店員もいた。

「ここに」

卓子を指す離原は堂々としている。人へ命令を下すことに慣れている仕草で、今更ながら霄琳は彼の身分どころか名前しか知らないのだと思つた。

(着ているものも上等なものだし、お金もたくさん持つてゐる。偉い人だつたりする?)

さつきだつて、離原が番頭に渡したのは金貨だ。番頭が目の色を変えるのも無理はない。

飛刃を使いこなす仙師だし、もしかしたら國の要職にでも就いているのかも知れない。

そんな風に霄琳が考へてゐるうちに番頭と店員は愛想笑いを浮かべながらそそくさと出て行き、袖をまくつた離原は水桶を床に置いた。

「まずは手を拭こう。痛ければ言つてくれ」「えつ、自分でできるよ」

傷はあるが、痛んで仕方ないというほどでもない。それなのに伸びてきた大きな手は霄琳の手を捕まえると、丁寧に拭い始めた。

くすぐつたまゝ、なんだか恥ずかしい気もする。だが離原の顔は真剣で、少しでも茶化してはいけないような気がした。

霄琳が黙つていると、ぱつりと小さな声が部屋に響いた。

「すまない、俺の警戒が甘かつたせいだ。痛かつただろう」

「そんなことないよ、むしろ離原は俺を助けてくれたんだから。怪我も、俺が転んだせいだし」黒衣の急襲も、妖魔と出くわしたのも予期せぬ事態でしかない。何ひとつ離原のせいではないし、命も落とさず、怪我も軽傷で済んだのだ。むしろ幸運だとさえ霄琳は思つた。

だが離原はそうは思つていないので、指の間を拭きながら首を振つた。

「いや、俺の気の緩みが招いた失態だ。今度からはもつと強固なものにする。……もう繰り返さない」

「離原……」

霄琳に告げているというよりは、自らに言い聞かせるように呟いた離原は、それからもくもくと霄琳の両手を拭き清めると、足も同じように拭き、手早く処置をしてくれた。

薬包に包まれた粉を水で軽く練り、腫れた患部に塗る。それから最後に包帯を巻きつけ、動かな

いように固定していく。手慣れた様子に思わず見入っているうちに処置は終わり、ようやく雷琳の足は解放された。

「一応固定したが、痛みがひどくなるようなら言つてくれ。巻き直す」

「うん、ありがとう」

足首の痛みはかなり軽くなっている。これなら明日は歩けそうだと考えていると、離原は部屋に一つしかない椅子を引き寄せて雷琳の前に腰かけた。

もう夜も遅い。月は中天を越えようとしているし、窓から見える街もすっかり灯りを落としている。雷琳も眼くなつてきてあくびが出そうになつたが、離原が突然口を開いたので、それも引っ込んだ。

「花鋏が成長した時、痛みはあつたか」

「なかつたよ。だから、いつ成長したのかもわからなくて……」

両手の甲を離原に向けると、下からすくうように取られ、それからくるりとひっくり返された。手の甲から伸びた蔓の絵柄は、手首の内側で交差して美しい紋様を描いている。それは、薄暗い中でもわずかに光っていた。

「でも、もしかしたら黒衣が来た時にはこうだつたのかも。花鋏が見えてるぞつて言つてたから」あの時の絶叫は、まだ耳に残っている。ふと不安になつて窓の外を見たが、夜闇が広がっているばかりだ。

ぽつんぽつんとわずかな灯りが所々に見えるだけの夜の風景。それを眺めて、雷琳は自分の記憶

のようだと思った。

雷琳がわかっていることは、自分に殺意を向けている人間がいるということと、手の甲にある花鋏は刺青などではないということだ。他は何もかもを忘れている。離原のことさえ、雷琳は何もわからぬ。

「……ねえ、離原。俺、何を忘れてるの？」

離原と出会つて、まだたつた数日だ。それでも多くのことを忘れていることを知つた。だからこそ思い出さなければいけないとは思つていたし、そうでなければこれから先どうするかも決められない。

けれど怖かつた。

命を狙われる理由があつて、それを自分は忘れてしまつていて。それだけじゃない。夢で見た花園も、華やかな街も、雷琳は懐かしいと思つた。あれは眠りの淵で見るあやふやな世界ではない。きっと、過去に見た景色だ。その中にいた男も——離原も、雷琳は知つているはずだ。

それらが一気に戻つた時、目の前に広がる現実はどう色を変えるのだろう。今はぽつかりと空いている記憶の穴が塞がつた時、そこに現れる真実が怖かつた。

「教えて、離原」

すべてを知らなくても、きっと雷琳よりは知つてはいるはずだ。斜面を転がる雪玉がどんどん大きくなるように、言葉に出してしまえば途方もなく増大していく不安。それから逃げるすべを問うよう、雷琳は自分を守ると言つてくれた男を見上げた。

離原は持ったままだつた霄琳の手を下ろすと、一度深く深呼吸をした。

「……長くなる。それでもいいか」

ゆっくりと頷いた霄琳の肩に、冷えるからと離原は上掛けをかけてくれた。

四

「……五百年前の話だ」

そう言つた離原に、霄琳は少なからず驚いた。けれど早々に話の腰を折るわけにもいかない。開きかけた口をあわてて閉じた。

「この国に、長命を願う皇帝がいた。この皇帝は貪欲で、仙師になれば百を超えて生きると言わ
れているのに、それでも足りないと思つていた」

「仙師つて百年も生きるの？」

「仙師ならば大体二百までは生きる。だが、皇帝はその上、神仙になりたかつた。神仙になれば、
寿命は千年以上とも言われている」

「千年……」

人間など、生きてもせいぜい七十歳で長老だ。百歳でも十分に驚きなのに、千年と言られて、そ
の膨大な時間に霄琳は絶句した。

「皇帝は永久の生命をほしていた。だが、修行の身である研仙にはなれても、仙師、ひいては神仙
になるには素養も長い修行も必要。もつと手っ取り早い方法はないかと文献を調べた皇帝は、特別
な桃の存在を知つた」

「桃？」

桃は確かに吉祥の果実と言われるが、どこにでも売っている。思わずぽかんと口を開けた霄琳に、離原は少し笑った。

「ただの桃じゃない。天仙界にある天帝の庭に生える、特別な仙桃だ。天帝をはじめとする神仙たちはこれを食して高い仙力を得ていると文献にはあった。だが、禍告嘆鈴が鳴り響いた時と、十年に一度の訪礼祭しかこちらから庭に入るすべはない」

「ちよつと待つて、禍告嘆鈴つてなに？」

離原は滔々と語ってくれるが、霄琳は話に追いつくのが精一杯だ。

すかさず飛んできた問いに、離原はすまないと頭を搔いた。

「禍告嘆鈴は、大災洞だいさいどうが開いた時に鳴り響くとされている大鈴だ。禍告嘆鈴が鳴れば、天仙界が人界を救う手助けをしてくれる」

「大災洞？」

わからないことばかりだ。本当に以前の自分はこれらの言葉を理解していたのだろうかとさえ思ひながら、霄琳は新しく増えた単語に眉を寄せた。

「大災洞は……そうだな、わかりやすく言えば穴だ。妖魔が出てくる穴。この世には、色んな所に綻びがあつて、妖魔はそこから出でてくる。これを災洞という」

「俺が会つた、あの……なんか頭が細い猪みたいなやつもそこから？」

「そうだ。あれは野狗子やっこで、戦の跡地に出たりするやつだ。人間の脳をすする」

「脳……っ」

思わず自分で自分を抱きしめた。あの時、わけもわからないながら銀の蔓で守られたが、あれがなかつたらと考へると今更耳の辺りがぞわりとした。

「あいつらも災洞から出てきたんだろう。そういった穴はどこかで勝手に開いて、またすぐ閉じる。だが数十年に一度、大穴が開く。これが大災洞だ。大災洞は勝手に閉じないうえ、大物が出てくる」

野狗子ですら怖ろしかつたのに、それを越えるようなものが現れるなど、聞いただけで鳥肌が立つた。

「わ、わかつた。続き、教えて」

これ以上聞いていては話がそれるし、更に恐ろしいことを言われそうだ。霄琳が続きを促すと、離原は五百年前の皇帝の話を再開した。

「大災洞が開いた時は禍告嘆鈴が鳴り、仙界から大災洞を閉じる助力を得られる。そのことに對する礼を尽くし、忘れないために行われるのが訪礼祭だ。皇帝はそれを待つことにした」

「大災洞はいつ聞くかわからないけど、訪礼祭はいつやるか決まつてるからか」

「そうだ。同時に、訪礼祭に参加する夏子静かしづいという研仙に目をつけた。彼が飛刃の名手だったからだ。皇帝は夏子静に、天帝の庭が開いたら仙桃を採つてくるように命じ、夏子静は訪礼祭の日に仙桃を盗んだ。だが、その時に誤つて禍告嘆鈴を壊してしまった」

「……っ」

不意にどくんと、鼓動が大きく跳ねた。ほんの一瞬めまいもしたが、瞬きの間にそれはなくなつていった。

(なに?)

思わず胸にそつと手をやるが、鼓動は落ち着いている。息苦しさや違和感もなかつた。

「そのまま夏子静は皇帝のもとへ……霄琳?」

「ううん、なんでもない」

疲れのせいだと片付けて首を振ると、離原は怪訝な顔をしたが、特に何も言うことなく、話を続けた。

「夏子静は皇帝の元へ急ぎ、受け取った皇帝は仙桃を食べた。そこへ天帝の率いる神仙たちがやつてきて、皇帝と夏子静は捕らわれた。二人は裁かれ、それぞれに罰を与えられた。皇帝は禍告嘆鈴が再び戻るまで老いず死なない不老不死となり、胸には呪紋が刻まれた。もし国が乱れば、呪紋は体中へ広がっていく。この呪紋に覆われるか、もしくは玉座を捨てた時、天仙界に封じられる千獣万妖が放たれる。この国は愚かな皇帝を生み出したとしてその罪を負うことになり、ありとあらゆる植物は枯れ、神仙の加護は失せ、綻びや大災洞から溢れた妖魔が跋扈する地となる。皇帝の肉体は千々に引き裂かれ、魂は天仙界の牢獄に繋がれ、肉体に負つた苦しみを千年繰り返すことになることが、奴に与えられた罰だった」

離原の口調は淡々としている。けれどわずかに眉の間が寄り、視線が下がつた。

「……夏子静へ下された罰は、壊れて碎けた禍告嘆鈴のかけらの回収だった。七つに碎けたうちの

一つはそのまま夏子静に宿つたが、残りはすべて人界に散らばつた。そして夏子静には、何度も生まれ変わり、大災洞が開くたびに現れる禍告嘆鈴のかけらを身に宿すことが命じられた。大災洞が閉じた時かけらは回収され、もともとあつた天仙界の庭に返されて修復される」

「じゃあ、皇帝は生き続ける呪いで、夏子静さんは何度も死ぬ呪い?」

「そうとも言えるな。皇帝は今も生き続いているが、何度も生まれ変わつてくる夏子静の名前はそれぞれ違う。だから総称して鈴祇と呼ぶようになつたんだ」

「…………でも、俺も鈴祇なら夏子静さんの生まれ変わりで、……それなら俺は、罪人?」

話を聞いた限り、夏子静は命令とはいえ、国にまで災禍が及ぶ呪いがかけられる発端を担つた人物だ。その生まれ変わりなら、自分も罪人だつたのかと呟いた霄琳に、離原はすかさず違うと言つた。

「夏子静や鈴祇たちは巻き込まれたに過ぎない。もしなじる声があるとすれば、その非難はすべて皇帝に向けられるべきだ。それに、鈴祇は人々を守る力がある。現にこれまで、大災が起つたびに鈴祇は民を守つてきた。尊ばれこそすれ、罪人と誇らされていい存在ではない」「守る? でも俺に、そんな力は……」

「ない、と言いかけて、霄琳は自分の手の甲を鮮やかに彩る花鋲を見た。

妖魔に襲われた時、この花鋲からは銀の蔓が出て丸い籠を作つた。霄琳はその中に閉じ込められ、結果として被害に遭つこともなかつた。霄琳が意図してやつたことではないが、視線をあげると、離原が頷いた。

「花鉢こそ鈴祇の証だ。大災洞の予兆が現れ始めると、花鉢が鈴祇の体に現れる」

「じゃあ、俺の体に花鉢があるつてことは、大災洞が開くつてこと?」

「そうだ。大災洞が開いた時、花鉢は成長を終える。鈴祇は花鉢の力で人々を守り、神仙たちは禍告嘆鉢のかけらの音を聞いて人界に下りる。そして大災洞が封印され、大災は終わる。……だが本来は、その力は——あの銀の葛は、大災洞が開いた時にのみ現れるはずなんだ。霄琳、どうやってあの力を使つた?」

「どうやつてつて……わからない、気付いたら蔓が生えて……」

あの時、霄琳はただただ苦痛に泣いていただけだ。銀の蔓が自分の手から生えたことなど、いまだに信じられないほどなのだ。

(何もわからない……でも、前の俺は全部わかつてたのかな)

離原の話にしてもそうだ。花鉢を持ち、銀の蔓操るのが鈴祇だと言われても、罪を償うために生まれ変わっているのだと教えられても、何ひとつ覚えがない。

黙り込んだ霄琳がしばらく考えこんでいるが、ジッと音がして、部屋に置いていた灯りが消えた。どうやら芯が燃え尽きたようだ。立ち上がった離原が油皿の様子を確認したが、嘆息して元の場所に戻した。

「……一気に詰め込んでも、混乱するだけだ。ちょうど油も尽きた。今日はもう休んで、明日の出立に備えよう

「うん……そうだね」

確かに、霄琳の頭の中は混乱の一途を辿るばかりだ。明日にはまた旅立つのだし、夜ももう遅い。

休むなら寝台を譲ろうと思つた霄琳は、離原が部屋の隅に座り込んだことに瞬きをした。
「離原、俺が床で寝るよ」

「いや、ここでいい。上掛けもあるから大丈夫だ」

離原は横になるつもりがないのか、壁に背を預けている。手には剣を握つて、むしろ休む気さえないように見えた。

「でも、そこじや休まらないよ。いいから寝台で寝て」

「お前こそ足の捻挫がある。床で寝れば体に障る」

頑として聞かない様子の離原だが、霄琳もここで折れたくはない。何もできない分、せめて寝台を譲る程度のことはしたかつたし、黒衣の急襲や飛刃での移動もあったのだ。疲れているはずの離原を勞わりたかった。

だが、離原は霄琳こそ寝台で寝ろと言う。ならばと霄琳は寝台の端に寄つた。壁に背中がぴつたりくつつくほどだ。そうすれば、狭いながらも人が一人横たわるぎりぎりの空間ができた。
「じゃあ俺、寝台で寝る。だから離原もここ来て」

「……」

野宿をする時は荷馬車で雑魚寝をしていたのだ。それよりも少し狭いが、寝れないことはない。
少なくとも、硬い床の上に座つたまま眠るよりはいいはずだ。

「早く」

離原が来てくれば上掛けもかけられない。そうこうしている間に寝落ちてしまいそうだ。
ここ、と寝台を叩くと、離原はため息をついてようやく寝台に上がってきた。

上掛けに丸まると、その上から更に一枚、離原がかぶつたものの半分をかけられる。そうすると一気に温かくなつて、霄琳の意識はあつという間にほどけ始めた。

「……霄琳」

「う、ん……」

離原が呼んでいることはわかつた。目を開けなければと思うのに、回つてきた腕の温もりに懐かしさを覚え、その心地よさがさらにはまつすぐな眉。

——そうだ。前もよく、こうやつて眠つた。

きっと今日はいい夢が見られる。何も怖いことなどないのだ。この腕の中にいる限り、恐ろしいことは起きない。霄琳はそう信じていた。



美しい田園風景がどこまでも広がつていた。

田んぼでは裾をからげて田植えをしている人々がいて、その脛の辺りはたっぷりと張られた水が

陽光を反射してきらきらと輝いていた。

あぜ道を子どもたちが走つていくが、そのうち彼らは美しい衣装をまとつた女官たちになつた。さらさらと裾をなびかせて歩く彼女らは霄琳の傍に来ると、後ろを歩き出した。

——ええ、ええ、もうじきお越しになられますよ。

——今日は蓮池を散策なさるのですよね。お召し物も、それに合わせましよう。そぞろ歩きながら、彼女たちは鈴のような声で笑い合う。霄琳も楽しくなつて笑うと、空を飛んでいた鳥が呼応するようにピイと鳴き、大きく羽ばたいた。すると大風が起つて、すべてを吹き飛ばした。

けれど怖くない。すぐに強い腕が霄琳を抱き留めてくれる。

——ありがとう。

微笑んだ霄琳に、抱き留めた男も笑みを返す。

普段はまつすぐに閉ざされているが、少し口角が上がるときのする笑顔になる口。それから高い鼻梁。顔を大きく横断する傷痕には荒々しさを感じるが、その上有る双眸は雄々しくも優しい光をたたえている。そして、黒い筆で一閃したようにまつすぐな眉。

何度も傍で眺めた容貌が近づいて、霄琳はそつと目を閉じた。ここから先、与えられるものを知つてゐるからだ。

降りてきた唇が合わさる瞬間、霄琳は伏せた瞼を薄く震わせて呟いた。

「……離原」



立ち読みサンプルはここまで

新しく買いたいな。荷馬車に揺られながらうとうと頭を揺らしていた霄琳は、ピーライと澄んだ鋭い鳴き声にはつとして顔をあげた。

見ると、馬の背に乗ったままの離原の腕に大きめの鳥が留まつたところだった。
伝書用の鳥なのか、細い脚には筒が付いている。そこから丸まつた紙を取り出しながら離原が振り返つた。

「霄琳、荷物の中に黒い包みがある。干し肉が入っているから、餌をやつてくれ」

「うん」

なんとなく視線を合わせづらい。それとなく視線をそらして荷物に向くと、爪の音を立てながら歩いてきた鳥が、ピーアイとまた鳴いた。

「待つて……あつたあつた。はい、お疲れさま」

一つだけ取つて目の前にぶら下げてやると、鋭い嘴がずいつと寄つた。

「怖がらないんだな」

鋭いくちばしが器用に干し肉をくわえるのを見ていると、離原が言つた。

離原は、読んでいた紙面から顔をあげてじつと見つめてくる。霄琳は見られていると思うとなおさら顔をあげづらくて、ぎこちなく頷いた。

「え、えつと……ちゃんとしつけられてるから囁まないし」

「そうか」

「うん……」

妙な空氣だが、この雰囲気の理由はわかつていた。

（あんな夢見たんじや、まともに顔見れない……）

今朝、霄琳は早く起きた。しかし心地よく爽やかな目覚めと言うにはほど遠く、衝撃と驚愕で起きたようなものだつた。
起きた忘れているような夢だつたら、幾分かよかつたかもしれない。しかしあまりに生々しく現実味のある夢だつた。

霄琳が見たのは、まぎれもなく離原とくちづけを交わす夢だつた。

抱きかかえてくれた腕の強さや布越しの温かさ、触れた唇のやわらかさも、目覚める直前までそうしていたと錯覚するほど鮮やかだつた。

そのうえ、目覚めても離原に抱えられるような形で、深く瞼を閉ざした顔が間近にあつたものだから、悲鳴を飲み込むのに一苦労した。

それからはもう眠れるはずがない。

頬どころか首や耳まで熱く感じるほど赤面してしまつた霄琳は、一刻も早く寝台から降りたかつ